

市内遺跡から出土した土器や瓦、石器など  
地域の教材を授業に使ってみませんか？

# ドキ土器kit

— 解説書 —

◆ 出土文化財を教材に！ 学校でのご利用をお待ちしています ◆



本物がもつ力で 学習を！

印象に残る





# 目次

|                      |    |
|----------------------|----|
| ① 縄文土器と弥生土器          | 1  |
| 縄文土器                 |    |
| 1 豊かな食料を生み出した土器      |    |
| 2 縄文土器の観察ポイント        |    |
| 市内の遺跡1（縄文時代）         |    |
| 弥生土器壺                |    |
| 1 農耕文化の土器            |    |
| 2 弥生土器の観察ポイント        |    |
| 市内の遺跡2（弥生時代）         |    |
| ② 縄文土器の石器と弥生の石器      | 6  |
| 石鏃（縄文時代）             |    |
| 石鏃（弥生時代）             |    |
| 石包丁                  |    |
| ③ 古墳時代の埴輪と土器         | 9  |
| 円筒埴輪                 |    |
| 須恵器蓋杯 須恵器甕           |    |
| 市内の遺跡3（古墳時代）         |    |
| ④-1 奈良時代の土器A         | 14 |
| 土師器杯 土師器椀 土師器皿 土師器高杯 |    |
| 須恵器蓋杯                |    |
| ④-2 奈良時代の土器B         | 17 |
| 土師器杯 土師器皿 須恵器蓋杯      |    |
| 須恵器横瓶                |    |
| ⑤ 奈良時代の瓦             | 20 |
| 蓮華文軒丸瓦 唐草文軒平瓦        |    |
| 丸瓦と平瓦                |    |
| ⑥ 奈良時代の硯と墨書土器・和同開珎   | 23 |
| 須恵器円面硯               |    |
| 墨書土器                 |    |
| 和同開珎                 |    |
| ドキ土器 Kit 利用案内        | 26 |

## ドキ土器 Kit ご使用上の注意◆

キット内の資料には破片もありますが、すべて文化財（考古資料）として貴重なものですので絶対に汚したり、壊したり、無くなったりしないよう取り扱いには充分注意してください。

- キットは使用時以外は施錠のできる場所で保管して下さい。
- 収納ケースからの出し入れは先生が正しく行ってください。出し入れの時には内容数量等を必ずご確認ください。
- 素手でさわったり、持っていただいてもかまいませんが、けっして床に落とさないように。思った以上に重いものもあります。特に接合してあるものは特に壊れやすいので、底を手で支えるようにして、必ず両手で持って下さい。
- 児童、生徒が触れる場合は先生が見ているところで行って下さい。取り扱いにならないように注意。手渡し時は特に注意して下さい。
- さわる時は、手荒く扱わないで下さい。土器をたたいたり、指ではじいたり、強い力は絶対にかけないで下さい。また、表面を強くなでたり、こすったりはしないで下さい。
- 石鏃、銭貨（和同開珎）など小さなものは紛失に特に注意してください。
- 資料を使ったりするようなこと（石器でものを切る、土器に食品をのせる、硯で墨をするようなこと）は絶対しないで下さい。

以上、よろしく申し上げます。

## ①縄文土器と弥生土器

セット内容（縄文土器片1・弥生土器壺1）

- 狩猟採集時代の縄文土器と農耕時代の弥生土器の違いを実物から学ぶ
- 縄文土器の使用によって増えた食料
- たくわえ用の容器がある弥生土器

### 縄文土器（じょうもんどき）

- 別所町 別所大谷口遺跡出土・縄文時代早期（約1万年前）

#### 1. 豊かな食料を生み出した土器

人類の誕生後、氷河の時代がくりかえされる中、人々は長い間、石器を主な道具として大・中型獣（ナウマンゾウ、オオツノジカなど）を獲物として追う生活をしていました（旧石器時代）。今からおよそ1万年前には気候の温暖化による海進により日本列島は大陸から離れ、植物相も西日本では春日山原始林にみられるようなカシやシイなどの照葉樹林（常緑樹の林）が広がり、ニホンジカ、イノシシやウサギなどの中・小型獣が増加していきました。人々はこうした自然環境の変化を背景に、石器の他に**土器**や**弓矢**など新しい道具を使い始めるようになります。これが縄文時代です。

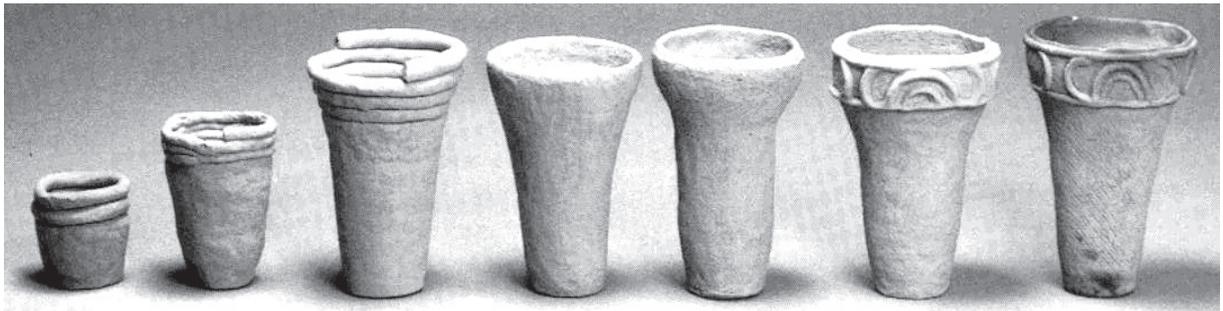
土器の使用と普及は植物相の変化によって豊富に得られるようになった**ドングリなどの堅果類**や野生のイモ類を食物として利用しようとする動きに対応するものと考えられており、土器を使って**煮沸**することにより、栄養価も高い堅果類の**アク抜き**とその食用が容易になったと考えられています。それまでは焼くか、せいぜい蒸し焼きにしていた肉類も煮るとやわらかく食べやすくなり、消化も良く、粉や小さな材料も利用することができ、栄養価の高いスープまでもが作れるようになったのです。

土器の使用により、人々の食べ物は格段に豊かになりました。食生活は動物主体から安定して確保できる植物主体へと変化したと考えられます。狩猟から**採集による食物獲得**が重要となったことから**定住化**も始まり、住居もつくられ、食料としての植物採集は植物の管理からやがては栽培へと発展していくこととなります。土器づくりは人類が最初に応用した化学変化であり、土器の使用は定住生活とも深く関わっています。

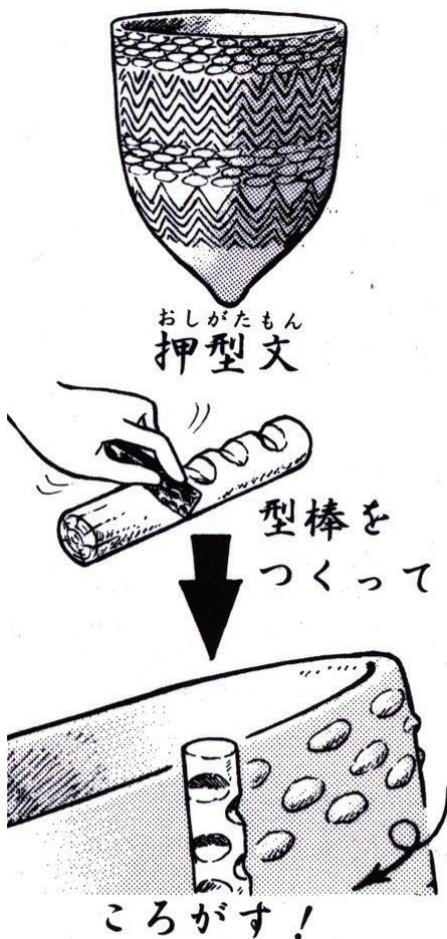
#### 2. 縄文土器の観察ポイント

縄文土器は日本にはじめて出現した土器で、約1万2千年前には出現したとされ、世界的にも日本の縄文土器は最古級の土器とされます。縄文土器の名は土器の表面に撚った紐を転がしてつけた「**縄紋**」がある土器が普遍的なことから名づけられており、縄文時代の名もこの土器の呼称に由来しています。しかしながら縄文土器には撚紐を巻きつけた棒や文様を刻んだ棒を

転がしてつけたものもあり、この土器の表面にはのこぎりの刃のようなジグザグの刻み目のある棒を横方向に転がして着けた**山形文**と網目状に刻みを彫って楕円形を削り残した棒を転がしてつけた横長の細かな**楕円押型文**がついています。破片ですが、縄文時代早期のもので**奈良市内では最も古い土器**のひとつです。縄文土器は煮炊き用の深鉢が一般的で、火にかけたため、外面には煤や吹きこぼれた炭化物が付着しているものもあります。紐（帯）状の粘土の輪を底から順に一段ずつ積み上げてつくったものも多く、乾燥後、地面をやや掘りくぼめた中におき、まわりに枯れ草や枯れ枝を積み重ねて焼き上げたと考えられ、焼成温度は焼成時間の長短により異なりますが、500℃ないし600℃から900℃ぐらいで焼かれています。



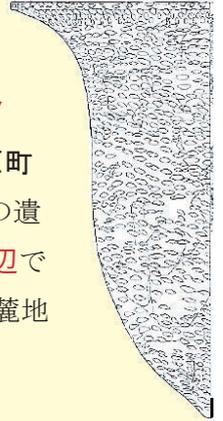
縄文土器・深鉢のつくり方



そまのかわ  
 杉ノ川町イモタ遺跡から出土した縄文早期  
 (約1万年前)の土器

## ◆市内の遺跡1（縄文時代）◆

奈良市内では縄文時代草創期（およそ1万2千～1万年前）に発達した投槍の先と考えられる石器、有茎尖頭器ゆうけいせんとうきが何点か出土していますが、この時期の土器はまだ見つかっていません。市内で見ついている最も古い土器は水間町、別所町、杣ノ川町で出土した縄文時代早期（およそ1万～6千年前）のものです。その他、阪原町では縄文時代中期末から後期（およそ4千～3千年前）大柳生町でも縄文時代後期の遺跡が見つかっており、縄文時代晩期（3千～2千3百年前）の遺跡はJR奈良駅周辺でも見ついています。山の幸や野の幸に恵まれた市内東部の高原地帯や春日山の山麓地帯一帯は縄文時代の人々にとっては絶好の居住地であったことがうかがえます。



### 弥生土器壺（やよいどき つぼ）

●藪生町 ゼニヤクボ遺跡出土 弥生時代中期（紀元前2世紀～紀元前1世紀）

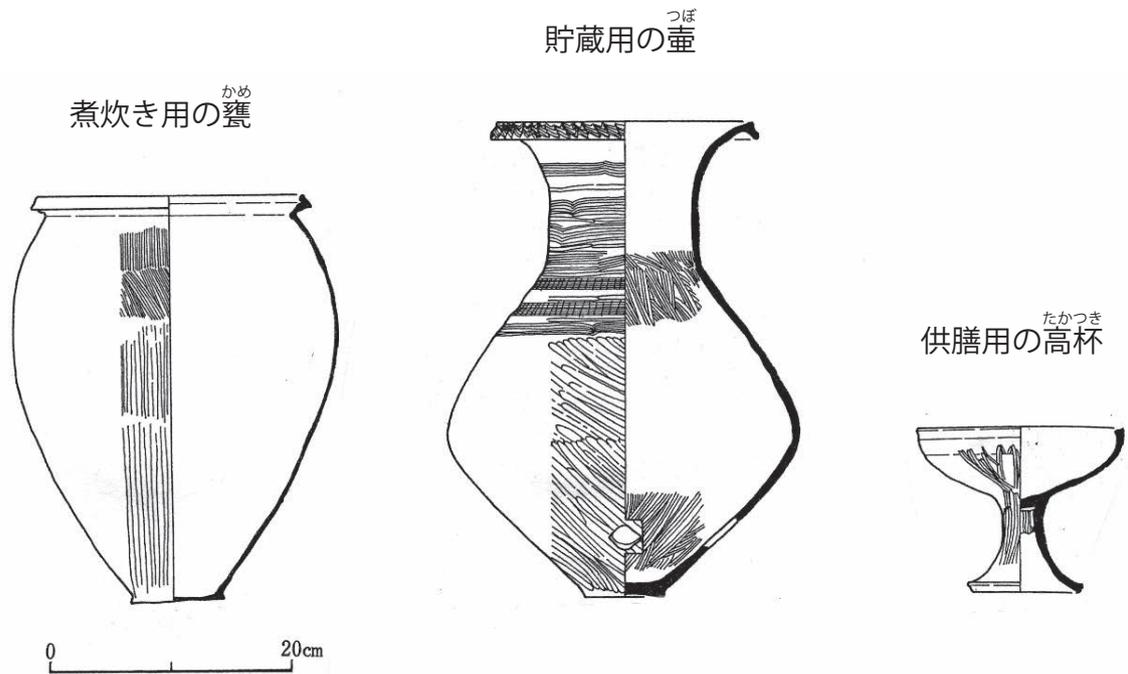
#### 1. 農耕文化の土器

日本列島で本格的な稲作が始まった紀元前4世紀頃から前方後円墳が現れる3世紀中頃ないし後半までの600～700年間が弥生時代と呼ばれます。明治時代に東京の本郷弥生町（東京大学付近）で発見された土器からその名がついています。弥生土器には縄文土器の深鉢にあたる煮炊き用の甕かめの他に、物をたくわえる貯蔵用の壺つぼがあることが特徴的で、壺には文様で飾ったものがあります。また、供膳用（食器、神へのお供え用）としての高杯（たかつき）や鉢などもあり、壺や高杯の形は中国や韓国の土器や容器にその原形が求められます。弥生土器に粃や米などの穀類や食料、水・酒などたくわえ用の土器があることは農耕社会である弥生時代を示す大きな特徴といえます。

#### 2. 弥生土器の観察ポイント

弥生土器は粘土紐（帯）を積み上げ、野焼きによって600℃～800℃で焼き上げた軟質素焼きの土器であることは縄文土器や古墳時代の土師器はじきと変わりません。

この土器は周囲に方形に溝を巡らした弥生時代の墓（方形周溝墓）の溝から出土した壺で、お供え用の壺と見られます。表面は縦方向にへら状の工具でていねいに磨いた後、肩の部分には凹凸のある板の木口で直線文、胴部には波状文をつけ、口縁部には刺突文、口縁の端には波形文の上に粘土の小円板を貼り付けています。弥生時代中期の代表的な飾られた壺です。



三つの種類がある弥生土器（近畿地方・弥生時代中期）

## ◆市内の遺跡2（弥生時代）◆

平城宮跡の下層でみつかった佐紀遺跡や柏木町では弥生時代前期（紀元前3～前2世紀）の土器が出土しています。佐紀遺跡は縄文時代晩期から続く可能性があり、弥生時代後期（1～3世紀）のたてあなじゆうきよあと（たてあな）や周囲に溝を巡らしたほうけいしゆうこうぼ（ほうけいしゆうこうぼ）も発見されており、弥生時代の大和盆地北部の中心的な村であったと考えられています。また、柏木町では弥生時代中期（紀元前2～前1世紀頃）の方形周溝墓が見つかっており、弥生時代後期には大森町、東九条町、四条大路、池田町、窪之庄町、県立西の京高校校内の六条山遺跡など遺跡の数も増え、東部の大柳生町、横田町、水間町にも弥生時代の遺跡が知られます。都祁藺生町の並松小学校周辺に広がるゼニヤクボ遺跡は弥生時代前期から古墳時代前期（3世紀後半～4世紀）までつづいた弥生時代の都祁の中心的な集落と考えられています。また、祭りのための道具とされる銅鐸も市内では秋篠町西山の丘陵から4点（東京国立博物館蔵）、山町東方の丘陵から1点（奈良国立博物館蔵・奈良県立橿原考古学研究所附属博物館展示）が出土しています。





1. 粘土採集 土層に露出した粘土層から粘土を採集する



2. 素地作り 土器作りに適した粘土に練りあげる



3. 成形 粘土紐を積み上げ、土器の形を作る

木の葉



4. 整形・施文 土器の仕上げをしながら、文様で装飾する



5. 焼成 徐々に自然乾燥した後、焼固める

土器のつくり方 (『ものづくりの考古学』東京出版から)

## ②縄文時代の石器と弥生時代の石器

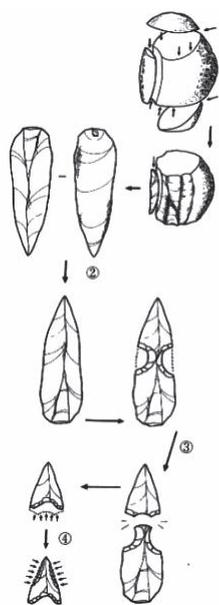
セット内容（縄文時代の石鏃1・弥生時代の石鏃1・弥生時代の石包丁1）

- ◆打製石器（石鏃）と磨製石器（石包丁）の違いを見る。
- ◆狩猟具としての縄文時代の石鏃と武器としての弥生時代の石鏃
- ◆なぜ石包丁で穂首刈をしたのか？

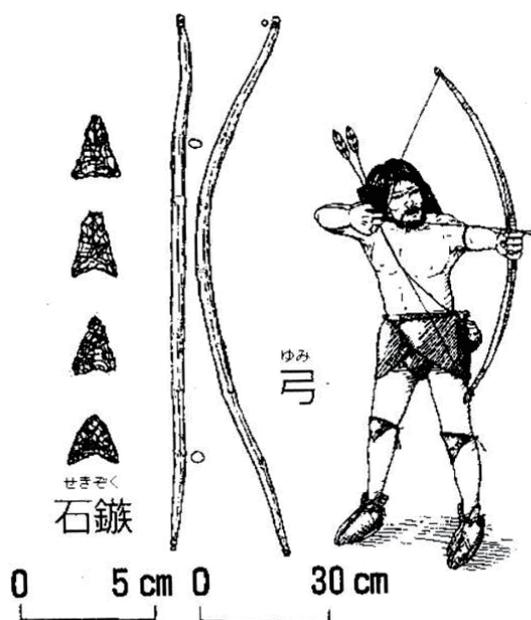
### 石鏃（せきぞく 縄文時代）

●福智院町出土・縄文時代（約1万～2千3百年前）

今からおよそ1万年前には気候の温暖化による海進により日本列島は大陸から離れ、植物相も西日本では春日山原始林にみられるようなカシやシイなどの照葉樹林（常緑樹の林）が広がり、動物もそれまでのナウマンゾウやオオツノシカなど大型獣（寒冷期を代表するナウマンゾウは約2万年前までにオオツノジカも1万年ほど前には絶滅（絶滅理由は気候温暖化だけでなく旧石器時代人の「オーバーキル」とする説もある）に代わり、ニホンジカ、イノシシやノウサギなどの中・小型獣が増加しました。弓矢はこうした獲物となる動物相の変化に対応して普及したとされ、逃げ足の速いこうした獣は犬と弓矢を使った狩、落とし穴なども使ってやっと手にいれることができました。矢の先につける石鏃（せきぞく）は縄文時代を代表する石器です。材料は奈良県と大阪府の境にある二上山からとれるサヌカイト（讃岐石）と呼ばれる石で、近畿地方一帯ではこの二上山のサヌカイトが旧石器時代から弥生時代まで長く石器の材料とされました。縄文時代には木材伐採用の石斧（せきふ）など磨製石器もありますが、石鏃は石を打ち割り、鹿角の先で押し剥いでつくった打製石器です。表面のデコボコのひとつひとつは縄文人が石を押し剥いだ痕です。



石鏃のつくりかたのひとつ  
（『技術の考古学』有斐閣から）



縄文時代の弓矢（『縄文再発見』神戸市立博物館から）

## 石鏃（せきぞく 弥生時代）

● 柏木町出土・弥生時代中期（紀元前2～紀元後1世紀）

稲作が行われるようになった弥生時代にはごく少数の磨製石鏃もありますが、多くは縄文時代以来の打製石鏃が使われています。近畿地方では弥生時代中期には矢柄（やがら）に差し込むための基部が突出し、大きく（3cm以上）、重く（3g以上）なり、殺傷力が増し、出土する数も増えていきます。これは弓矢が武器に変質したことをものがたるとする説があり、農耕による富の蓄積は人々の間に争い（戦争）を生み出し、弥生時代には弓矢は狩の道具から人殺しの道具ともなっていたと考えられています。シカやイノシシを射る矢は、ときには敵になった隣のむら人にも向けられるようになったのです。弥生時代の墓からは石鏃が射こまれた人骨も発見されています。古墳時代にはさらに貫通力を増した鉄鏃てつぞくが一般化していきました。小さく（3cm未満）軽い（2g未満）縄文時代の石鏃と大きく重い弥生時代の石鏃は同じ打製石器でありながら大きく違ってきます。

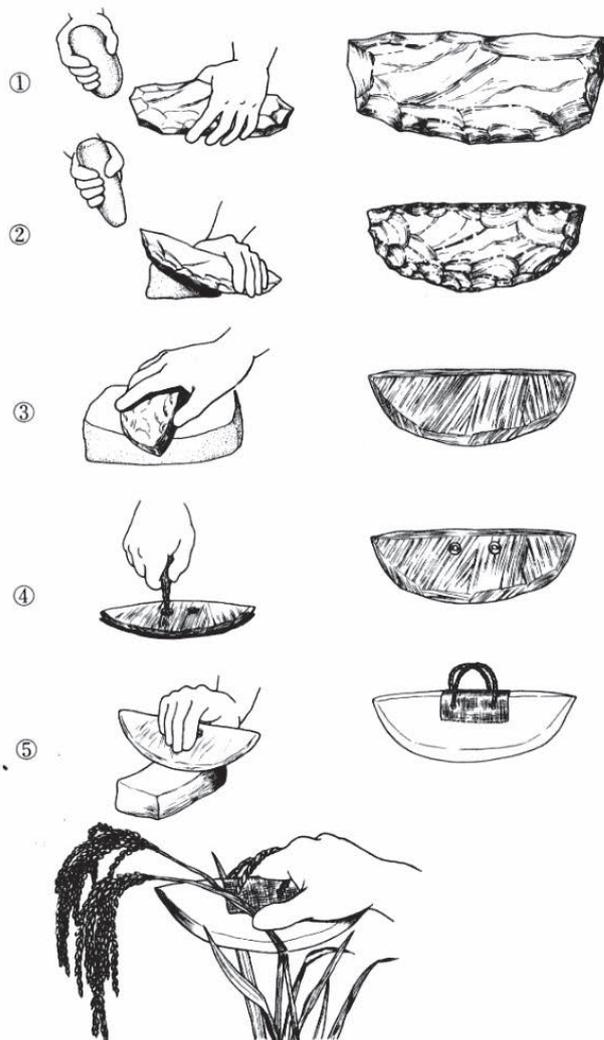


弥生時代の武器（『弥生時代の社会』至誠堂から）

## 石包丁（いしぼうちょう）

●大宮町五丁目出土・弥生時代中期（紀元前2～紀元後1世紀）

穀物の穂とくに稲穂を摘み取る石器です。弥生時代の稲作をものがたる磨製石器<sup>ませいせつき</sup>としてよく知られています。中国、韓国にも同形のものがある大陸系磨製石器<sup>たいりくけい</sup>で、稲作が稲だけでなく、こうした農具とともに稲作技術として伝えられたことがわかります。石包丁の名は穂摘具の機能にそぐわないため、「石製穂摘具」と呼ぶべきだと最近、提唱されています。弥生時代の稲はみのりの時期が不揃いで、一度に刈り取ることができず、みのったものから稲穂をつみとる必要があります、この穂摘が繰り返されることにより、早くみのる稲と遅くみのる稲の「品種」を選び分けるようになったとも考えられています。石包丁の形には地方差があり、北部九州では韓国と同じ背が直線的で刃が湾曲した半月形のもの、近畿地方中央部では弥生時代中期以後は背が湾曲し直線あるいは内反りの刃をもつものが一般的です（教科書に載っている石包丁は？）。割っておおよその形をつくり、砥石で磨き、孔を両側から開けて貫通させ、仕上げ研ぎをしてつくっています。やわらかい粘りをもつ石で作られ、この石包丁は吉野川（紀ノ川）流域にみられる緑泥片岩<sup>りょくていへんがん</sup>でつくられています。



石包丁のつくりかた  
（『技術の考古学』有斐閣から）

### ③古墳時代の埴輪と土器

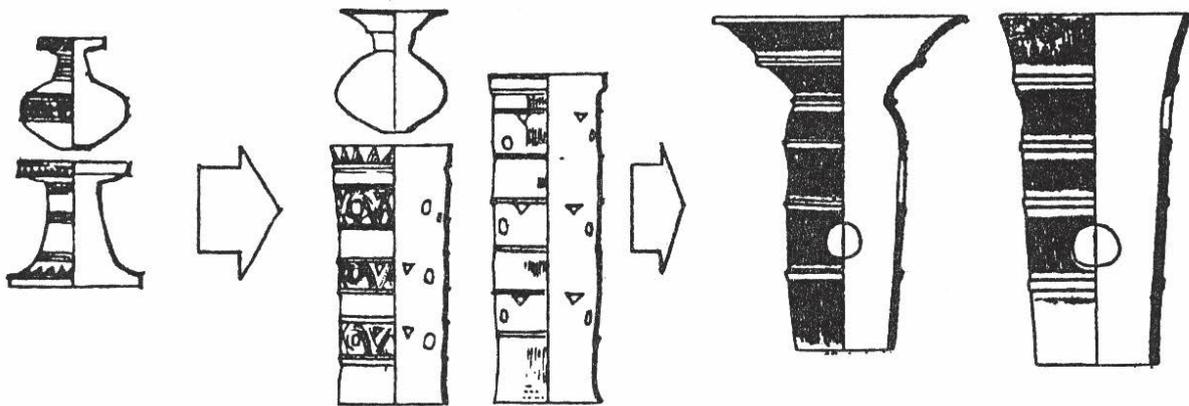
セット内容（円筒埴輪2・須恵器蓋杯1・須恵器甕片1）

◆埴輪と須恵器の実物から古墳と古墳時代に取り入れた新しい渡来技術について学ぶ。

#### 円筒埴輪（えんとうはにわ）

- ①大安寺四丁目 杉山古墳出土・古墳時代中期（5世紀後半）
- ②横領町 菅原東遺跡埴輪窯跡・古墳時代後期（6世紀）

鍵穴形（円プラス四辺形）の平面形をもった前方後円墳の出現をもって古墳文化は成立し、3世紀後半～6世紀末までが古墳時代とされます。埴輪はこの古墳の上に立て並べた焼き物（土製品）です。土管形の円筒埴輪と人物、動物、家などをかたどった形象埴輪がありますが、最も多いのがこの円筒埴輪です。円筒埴輪は弥生時代に壺をのせて祭りに用いた器台<sup>きだい</sup>から発展したものとされており、古墳をとりまくように列状に大量に立て並べられます。粘土紐（帯）を積み上げてつくり、外面には数段の突帯（箍たが）がめぐり、そのあいだに円形の透孔（すかしあな）があげられています。①と②のどちらの破片もよく見れば透孔の位置がわかります。高さは数十センチから1m程度のものが多いのですが、中には2mを越える巨大なものもあります。表面を整えるために掻きならした線状の痕跡がついていますが、これは薄板の木口で掻きならし、板の木目による凹凸がついたものです。ならず方向が時期によって違い、この線の方  
向で埴輪の年代を知ることができます。①の大安寺の杉山古墳のものは横方向の細かな目がついており、突帯も高く、しっかりしていますが、②の菅原埴輪窯のものはやや粗い斜め方向の目がついており、突帯が低く、雑につけており、時代が下るほど作り方が省略されていったことを物語っています。また、①の杉山古墳のものは明るい橙褐色に焼き上げていますが、②の菅原埴輪窯のものは灰色で硬く、須恵器と同じく窯（窖窯・あながま）で焼かれたものです。奈良市西北部は埴輪つくりや古墳づくりに携わった工人（土師部<sup>はじべ</sup>）を率いた土師氏<sup>はじし</sup>（後の菅原氏、秋篠氏）の本拠地で、菅原東遺跡はその本拠地に営まれた埴輪窯跡で、発掘調査後は菅原はにわ窯公園として整備されています。



弥生時代の壺・器台から埴輪へ



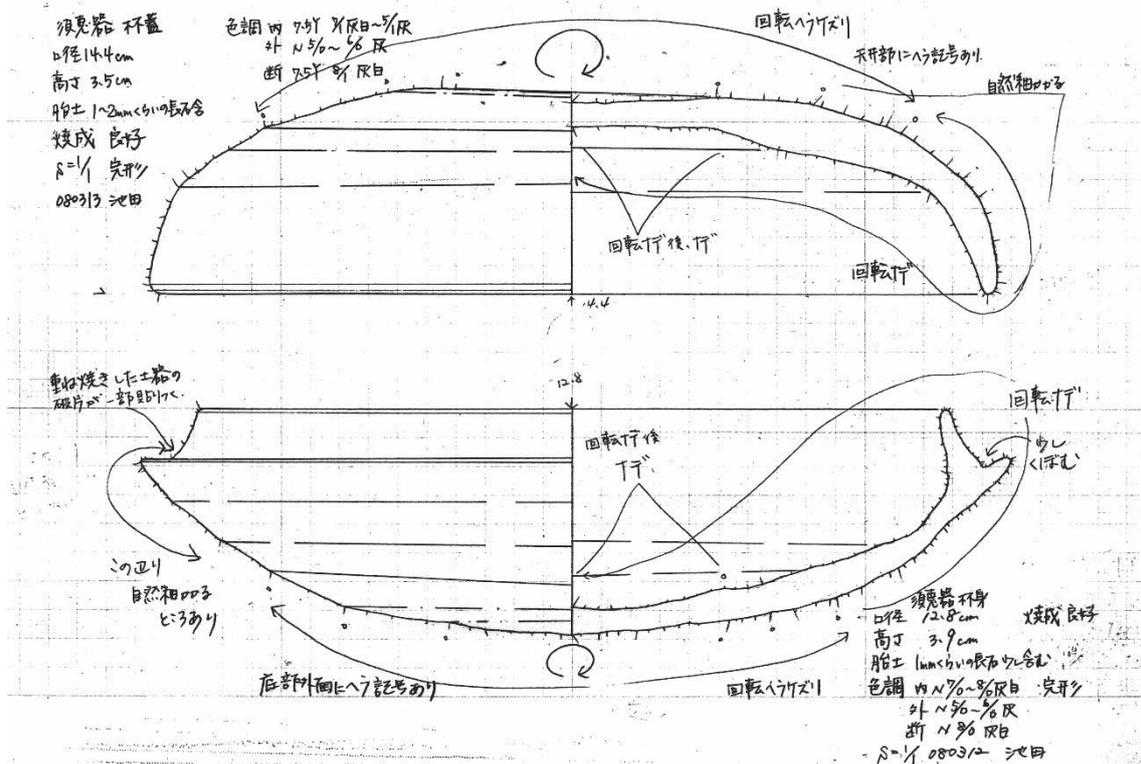
復原された古墳の埴輪列（北葛城郡河合町ナガレ山古墳）

## 須恵器蓋杯（すえき ふたつき）

● 杏町出土・古墳時代後期（6世紀）

古墳時代には弥生土器が発展した軟質素焼きの土器、**土師器**が使われましたが、5世紀に渡来人たちによって韓国からのぼり窯（窖窯・あながま）を使い、**高温**（1000℃以上）で土器を焼く技術が日本に伝えられました。こうして焼かれた**灰色**（ねずみ色）で**硬質**の土器を**須恵器**と呼んでいます。この須恵器が平安時代から鎌倉時代に備前焼や常滑焼などの焼締め陶器に発展していきます。硬質なため火にかけることができないので、この時代、煮炊用には土師器が使われ、**貯蔵用**の甕甕は須恵器、**食器**には須恵器と土師器が使われました。資料は食べ物を入れるお供えや食器として使われたと考えられる蓋杯で、椀形や皿形のないこの時代の食器の主役です。蓋受けのたちあがりをもたえた丸底の杯形の身と直径がほぼ同じの蓋が組み合わせになります。粘土紐を積み上げおおよその形をつくり、轆轤（ろくろ）の回転による遠心力を利用して成形しています（**巻き上げ轆轤技法**）。蓋の外側の頂部、杯の外側底部には回転させながら**ヘラで削った跡**が観察され、内側と口縁部付近は**水をつけてなでた様子**がよく残っています。須恵器を焼いた窯は丘陵斜面にトンネルないし溝を掘り、粘土で壁と天井をつくったもので、最後に焚口を閉塞して焼き上げることから、酸素の供給が抑えられ、土器に含まれる鉄分が還元され、青灰色の色あいに焼き上がります（還元炎焼成、縄文、弥生、土師器は酸化炎焼成のため赤っぽくなる）。須恵器の外側には燃料の木灰が降りかかって溶け、ガラス化し自然釉になったものがあり、窯内は1240℃以上になったものと考えられています。須恵器の製作技法は韓国

古代の陶質土器と直接つながるもので、**窯による焼成**と**轆轤**を使った成形技法、どちらもそれまでの日本にはなかった革新的な技術で、この技術によって規格性のある器が大量につくられるようになり、須恵器以後、土器は誰もが作るものではなく、**専門の陶工**がつくるものになります。

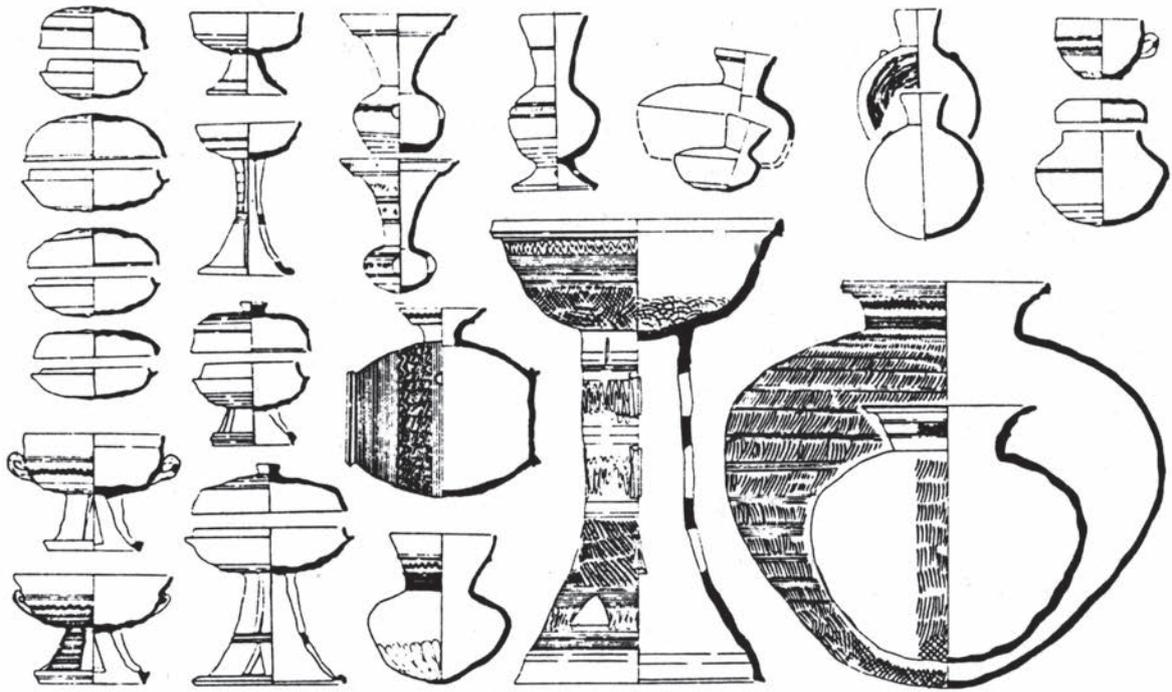


古墳時代須恵器杯身・杯蓋の実測図

## 須恵器甕片（すえき かめ）

● 杏町出土・古墳時代後期（6世紀）

水や酒、穀物を貯蔵した須恵器の甕の破片です。甕など須恵器の大型品は粘土紐（帯）を積み上げながら、内側に当て具（あてぐ）をあて、外側から叩き板で叩き締めて形をつくっています（**叩き技法**）。当て具はわずかに凸面をもつ円形のもので、同心円を刻んだものです。叩き板は羽子板状のもので表面に格子や平行線を刻んだもので、叩き締め効率と粘土からの離れをよくするための工夫です。このため、須恵器の甕など大型品の**内側には同心円状の圧痕**（青海波文）が、**外面には格子や平行線の叩き目**が残っています。この技法も須恵器独特の技法です。



さまざまな須恵器（近畿地方・古墳時代）



たたき技法による須恵器づくり（『技術の考古学』有斐閣から）

### ◆市内の遺跡3（古墳時代）◆

奈良山丘陵の麓には古墳時代前期後半（4世紀後半頃）に**五社神古墳**（神功皇后陵古墳）、**佐紀御陵山古墳**（日葉酢媛陵古墳）、**佐紀石塚山古墳**（成務天皇陵古墳）、**宝来山古墳**（垂仁天皇陵古墳）など全長200mを越える巨大な前方後円墳がつけられています。これらは皇室の陵墓とされているため、内容が不明な点が多いのですが、この時期の日本最大級の古墳であり、大和王権を代表するこの時期の大王（おおきみ）一族の墓とする考えが有力です。大王の墓は古墳時代前期前半（3世紀後半～4世紀前半）の奈良盆地の東南部（三輪山麓・桜井市、天理市）の纏向古墳群、柳本古墳群、大和古墳群から佐紀の地に移ったものとみられており、背景に政権の交替を考える説もあります。この時期には**富雄丸山古墳**、**不退寺裏山古墳**、**古市方形墳**なども営まれ、若草山山頂の**鶯塚古墳**はやや遅れ、5世紀に入って造られたものです。

佐紀古墳群東部の**コナベ古墳**、**ウワナベ古墳**、**ヒシャゲ山古墳**（磐之媛陵古墳）は古墳時代中期（5世紀）のもので、大阪の誉田山古墳（応神陵古墳）や日本最大の大仙古墳（仁徳天皇陵古墳）とほぼ同時期のもので、**大安寺杉山古墳**や山町の**ベンショ塚古墳**も同じく古墳時代中期のもので、これらは奈良盆地の東北部を本拠とした和珥氏の一族とされる春日氏や大宅氏などの豪族の墓とも考えられ、都祁の**三陵墓古墳**は鬮鷄国を治めた鬮鷄国造の墓とみる見方が有力です。

古墳時代後期（6世紀）には横穴式石室をもつ小さな円墳が群集して作られるようになり、古墳をつくれる階層が広がったことがわかります。山町の**五つ塚古墳群**はその代表的なもので、こうした群集墳は柳生、大柳生、東里、田原地区にもみられます。

市内の西北部は古墳時代に古墳の造営にもかかわった豪族、土師氏の本拠地のひとつで、歌姫町、山陵町、西大寺赤田町、敷島町、宝来町などで見つかっている埴輪づくりの技術を応用した**陶棺**や埴輪棺はこの土師氏、土師部の人々の墓と考えられています。また、平城ニュータウンの神功一丁目にある**石のカラト古墳**は飛鳥の高松塚古墳と同様の石室をもつ7世紀末～8世紀初頭の終末期の古墳で、整備されており、上円下方墳の古墳の形がよくわかります。

## ④－１ 奈良時代の土器 A（貴族の食膳）

セット内容

（土師器杯 1・土師器椀 1・土師器皿 1・土師器高杯 1・須恵器蓋杯 1 セット・復原折敷 1）

- ◆土器からみた律令制度
- ◆金属器をまねた土器
- ◆地位によって異なる食器セット

奈良時代に使われた土器には古墳時代とおなじく弥生土器の系譜をひく軟質素焼きの土師器と古墳時代に韓国から伝わった技術で高温に焼かれ、青灰色をした硬質の須恵器があります。土師器は煮沸具、須恵器は貯蔵具として用いられましたが、食器には土師器、須恵器のいずれもが使われています。須恵器杯は奈良時代の食器の一般的なものですが、底には高台がつけられ、蓋にはつまみがついています。土師器は外側を生乾き時にへらのようなもので磨き、光沢をもたせています。これらの奈良時代の土器の形は飛鳥時代に現れ、中国や韓国の金属製食器の形をまねた形と考えられています。地位が高い皇族や貴族は金属の食器や漆塗りの食器を使ったと考えられ、箸が使われるようになったのもおそらく奈良時代からだとされています。奈良時代は律令制度といった国のしくみだけでなく、食器や食事法まで大陸風に改められた時代であることをこれらの土器はものがたっています。さらに平城京の土器は杯、皿、椀、高杯など器の種類が豊富で、同じ形をした器にも大きさの違うものがいくつかあり、規格性をもっています。土器はこの時代には商品にもなっており、値段は大きさ（口径）で決められ、蓋のつくものは蓋の無いものの倍の値段で、土師器と須恵器は区別したようですが、大きさが同じであればほぼ同額であったことが知られます。宮中儀式の宴会などでは位によって献立の品数や量が定められ、使われる器の種類、大きさや数が異なっていたようで、割り箸のように一度きりの使用で捨てられることもあったとみられます。日常には曲物や木椀を食器として使い、土器の食器は儀式用、儀礼用に用いる特殊なものだったのかもしれませんが。奈良時代の地方の集落遺跡から出土する土器は数種の杯類の食器と煮炊具の甕といった単純な組み合わせで、食器として使われる土器の種類と出土量が多いことが平城京の特徴といえます。平城京に税や交易品として運ばれた須恵器には備前（岡山県）、播磨（兵庫県）、和泉（大阪府）、尾張（愛知県）、美濃（岐阜県）などで作られたものもあり、こうした地域が後に焼き物の産地として発達していきます。

## 土師器杯（はじきつき）

●大安寺西一丁目 平城京跡（左京五条二坊）出土 奈良時代（8世紀）

大安寺西小学校建設時の事前発掘調査で発見された奈良時代の井戸から出土したもので、ほぼ完全な形が残っています。やや深い平底の器でご飯や汁用の器と考えられています。口縁部の外側と内側に水をつけてなでて整えたあとがよく残っており、底の外側に残るデコボコは作った人の指押さえのあとで、その上をへらで削って平らにして作っていることもわかります。奈良時代中頃には三種類大きさが違うものがあります。

## 土師器椀（はじきわん）

●三条宮前町 平城京跡（左京四条四坊）出土 奈良時代（8世紀）

小さな平底をもつ椀形の土器で酒を入れたり、漬物、味噌や塩など調味料（ちょっとしたおつまみになった）を入れた器と考えられています。これもほぼ完全な形が残っており、内側になでて仕上げたあとが残り、外側は削った後、生乾きのときにへらで細かく磨いたあとがよく残っています。この形の器も奈良時代中頃には大小二種類のものがあります。

## 土師器皿（はじきさら）

●杏町 平城京跡（左京八条三坊）出土 奈良時代（8世紀）

広く平らな底をもつ皿形の土器で、魚などおかずを盛ったと考えられます。内側は杯や椀と同じくなでて、仕上げていますが、外側にはへらで削ったあとがそのまま残されています。このつくり方は奈良時代後期に多く、大量生産による省力化によるものとみられます。

## 土師器高杯（はじきたかつき）

●法華寺町 平城京跡（左京二条二坊）出土 奈良時代（8世紀）

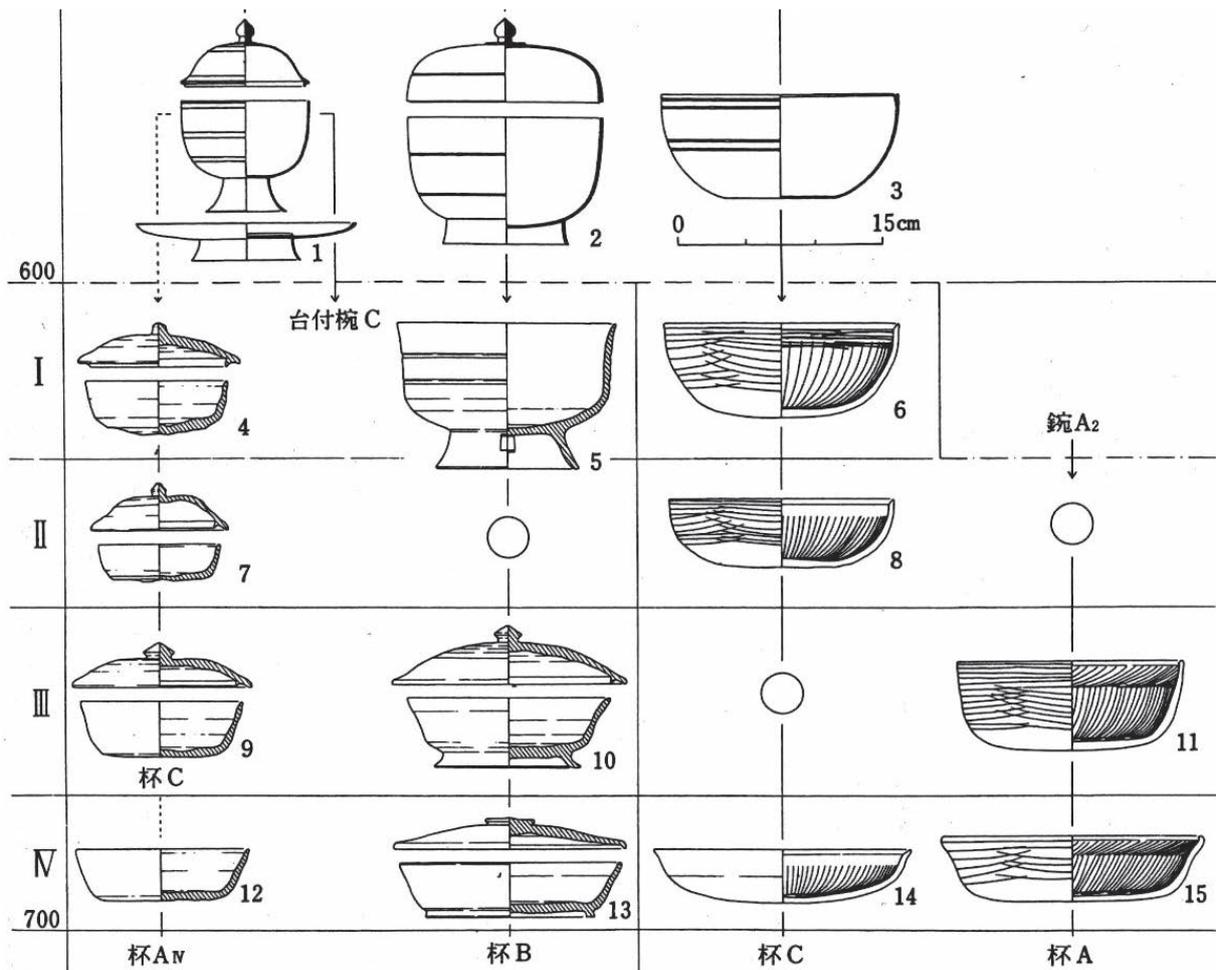
脚がついた器、高杯は弥生時代に伝わった器の形で現在も神社やお寺のお供えに使われています。菓子やデザート<sup>デザート</sup>の果物などが盛られたようで、出土数が少なく、位の高い人あるいは数人にひとつというような使い方をしたと考えられています。脚はへらで削り多角形にしていますが、新しいものほど脚が長くなる傾向があります。脚のすそや皿部分の外側は生乾きの時にへらで磨き、皿部分にはへらで模様（<sup>あんもん</sup>暗文）をつけています。

## 須恵器蓋杯（すえき ふたつき）

- （杯）大安寺三丁目 平城京跡（左京六条三坊）出土 奈良時代（8世紀）
- （蓋）八条町 平城京跡（左京七条二坊）出土 奈良時代（8世紀）

高台のついた杯と宝珠形つまみのついた平たい蓋がセットになります。この形は中国などから伝わった金属製の食器の形をうつしたもので、外国の文化を積極的に取り入れた飛鳥奈良時代をよく表しています。

（※この蓋と杯はまったく違う場所から出土したのですが、奈良時代の土器には規格性があるため、こうした違った地点から出土したものでも、組み合わせることができます。また、蓋が土師器杯ともほぼ同じ大きさで、土師器と須恵器の間に互換性があったこともわかります。）



## ④-2 奈良時代の土器B（庶民の食膳と変わった形の壺）

セット内容（土師器杯1・土師器皿1・須恵器蓋杯1セット・須恵器横瓶1・復原折敷1・）

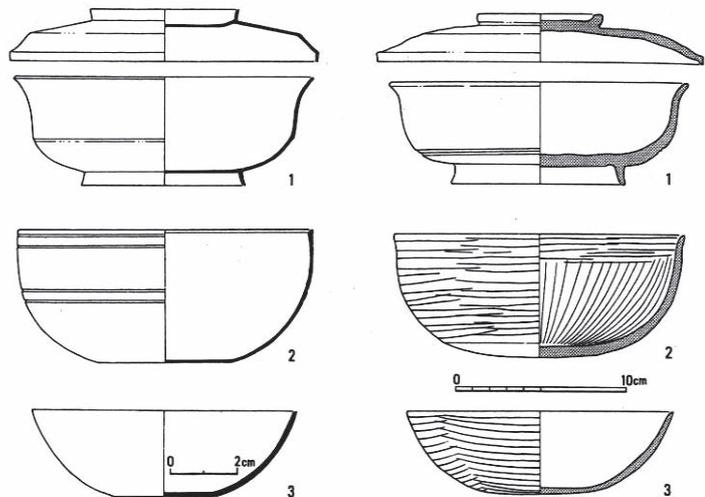
- ◆土器からみた律令制度
- ◆金属器をまねた土器
- ◆地位によって異なる食器セット

奈良時代に使われた土器には古墳時代とおなじく弥生土器の系譜をひく軟質素焼きの土師器と古墳時代に韓国から伝わった技術で高温に焼かれ、青灰色した硬質の須恵器があります。土師器は煮沸具、須恵器は貯蔵具として用いられましたが、食器には土師器、須恵器のいずれもが使われています。

須恵器杯は奈良時代の食器の一般的なものですが、底には高台がつけられ、蓋にはつまみがついています。土師器は外側を生乾き時にへらのような道具で磨き、光沢をもたせています。これらの奈良時代の土器の形は飛鳥時代に現れ、中国や韓国の金属製食器の形をまねた形と考えられています。地位が高い皇族や貴族は金属の食器や漆塗りの食器を使ったと考えられ、箸がおそらく使われるようになったのも奈良時代からだと言われています。奈良時代は律令制度といった国のしくみだけでなく、食器や食事法まで大陸風に改められた時代であることをこれらの土器はものがたっています。

平城京から出土する土器は杯、皿、椀、高杯など器の種類が豊富で、同じ形をした器にも大きさが違うものがいくつかあり、規格性をもっています。土器はこの時代には商品にもなっており、土師器と須恵器は区別したようですが、大きさが同じであればほぼ同額で、廉価な1～2文のものが多く、蓋のつくものは蓋の無いものの倍の値段がしました。宮中儀式の宴会などでは位によって献立の品数や量が定められ、使われる器の種類、大きさや数が異なっていたようで、割り箸のように一度きりの使用で捨てられることもあったとみられます。奈良時代の地方の集落遺跡から出土する土器は数種の杯類の食器と煮炊具の甕といった単純な組み合わせで、食器として使われる土器の種類と出土量が多いことが都の特徴といえます。

平城京に税や交易品として運ばれた須恵器には備前（岡山県）、播磨（兵庫県）、和泉（大阪府）、尾張（愛知県）、美濃（岐阜県）などで作られたものもあり、こうした地域が後に焼き物の



金属製容器とそれを模倣した土器  
（『土器様式の成立とその背景』西弘海から）

産地として発達していきます。

(※奈良時代の一般的な食器は土器と考えられていますが、平城京から出土する多種多様な土器の食器は儀礼用、儀式用で、残ることが少ない轆轤でひいた木椀や曲物などがこの時代の日常の食器とする意見もあります。土器を食器に使ったとしても、平城宮の宮廷や官庁ではその用途に厳密な区別があるようですが、京内の日常生活ではさほど厳密な使い分けをしていないようです。地方の農村と同じくひとつの杯や椀はいくつもの役目を兼ねており、そうした食器の使い方がこの時代の民衆の貧しさを象徴しているものとも考えられています。)

### 土師器杯 (はじきつき)

●法華寺町 平城京跡 (左京二条二坊) 出土 奈良時代 (8世紀)

やや深い平底の器でご飯や汁用の器と考えられています。平たくした粘土板に粘土紐を輪積みして作り、水をつけてなでて仕上げています。底部分の外側には製作時に敷いた柏の葉らしい葉脈のあとがわずかに残っており、轆轤のかわりにすべりやすい木葉を敷いてその上で土器を回しながら仕上げたことがわかります。

### 土師器皿 (はじきさら)

●四条大路一丁目 平城京跡 (左京四条三坊) 出土 奈良時代 (8世紀)

やや丸底ぎみの皿形の土器で、魚などおかずを盛ったと考えられます。杯と同じく回しながら、なでて仕上げています。

### 須恵器蓋杯 (すえきふたつき)

● (杯) 大安寺四丁目 大安寺旧境内 (左京六条四坊) 出土 奈良時代 (8世紀)

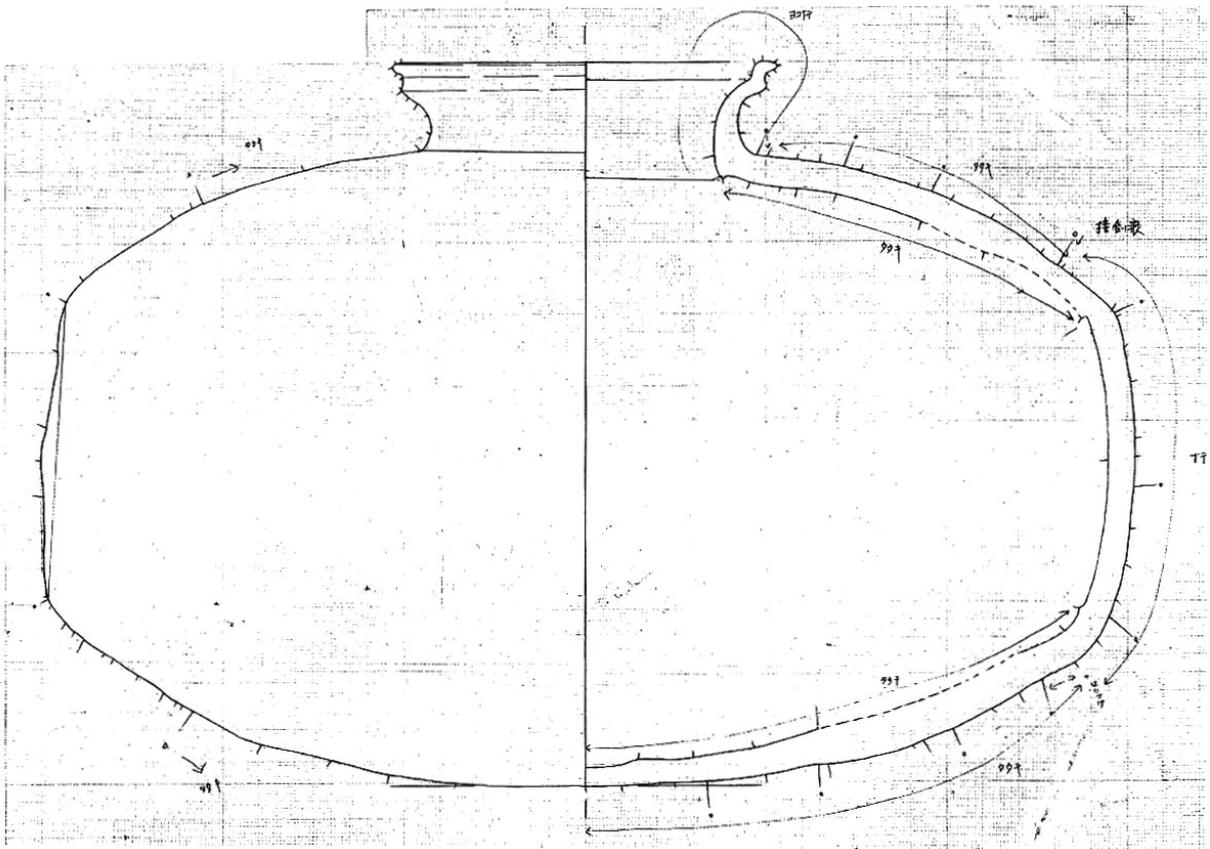
● (蓋) 法華寺町 平城京跡 (左京二条二坊) 出土 奈良時代 (8世紀)

高台のついた杯と宝珠形のつまみのついた平たい蓋がセットになります。この形は中国などから伝わった**金属製の食器**の形をまねたもので、外国の文化を積極的に取り入れた飛鳥・奈良時代をよく表しています。奈良時代の須恵器蓋杯は五種類ほど大きさの違うものがあります。(※この蓋と杯はまったく違う場所から出土したのですが、奈良時代の土器には規格性があるため、違った地点から出土したものでも、組み合わせることができます。)

## 須恵器横瓶（すえき よこべ）

●菅原町 平城京跡（右京二条三坊）出土 奈良時代（8世紀）

ラグビーボール状の体部に口をつけた置くことのできない変わった形をした壺です。いったん縦長の壺をつくり、上部を閉じてラグビーボール状のものを作り、改めて横に穴をあけて口を取り付けています。粘土紐（帯）を積み上げながら、内側に当具（あてぐ）をあて、外側から叩き板で叩き締めて形をつくっています（**たたき技法**）。当具はわずかに凸面をもつ円形のもので、同心円を刻んだものです。叩き板は羽子板状のもので表面に平行線を刻んだもので、叩き締め効率と粘土からの離れをよくするための工夫です。このため、内側に同心円状の圧痕（青海波文）が、外面には縦横に二度叩いたためについた交差した平行線の叩き目が残っています。（さて、この壺はどちらを下にしてつくったのでしょうか？よく観察してみてください。）この形の壺の形は**韓国がふるさと**で、渡来人が伝えたものらしく日本では古墳時代後期（6世紀）につくられるようになり、平安時代には無くなります。水や酒などを入れ、脇にかかえて運ぶ壺で、韓国では最近までこの形の壺が使われていました。「倭壺」とも呼ばれます。奈良時代には盛んに使われ、井戸枠に置いて水を汲もうとして落としてしまったのか、奈良時代の井戸の中からけっこう割れずに完全な形をしたものが出土します。



奈良時代の須恵器横瓶の実測図

## ⑤奈良時代の瓦

セット内容（軒丸瓦1・軒平瓦1・平瓦1・丸瓦1）

- ◆奈良時代の瓦のデザインから天平文化の国際性を学ぶ。
- ◆古代の屋根瓦の重さを実感する。

瓦は中国では西周（紀元前11世紀～前771年）の時代からあり、日本では飛鳥寺造営のために百済から渡来した瓦工（瓦博士と呼ばれた）が作ったものが最初で、寺院に用いられ、藤原宮の造営以後、**宮殿や役所**など恒久的な礎石建物にも用いられるようになります。奈良時代には貴族の邸宅にも瓦葺きが許されますが、京内では築地塀を除くと宅地内からの出土数はわずかです。平安時代も状況は変わらず、律令制度が衰えると瓦葺の建物は長く寺院だけになります。戦国時代に奈良につくられた**多聞城**（城跡は現在の若草中学校）ではじめて瓦葺建物が現れるのは、大寺院がある奈良に瓦づくりの技術があったからだと考えられます。以後、城郭や大名屋敷にも瓦が用いられるようになり、江戸時代には丸瓦と平瓦を一体化した**棧瓦**が発明され、町屋を中心に防火対策として民家に瓦葺が普及して行きました。

### 蓮華文軒丸瓦（れんげもんのきまるがわら）

●大安寺一丁目 大安寺旧境内出土 奈良時代（8世紀）

平城京に建てられた大寺院のひとつ大安寺の軒先を飾った瓦です。今の瓦よりずいぶん重く、完全な形ものだと4～5kgの重さがあります。文様部分（瓦当）は木型（笥）に粘土を押し込んでつくっています。ハスの花を上から見た**蓮華文**（紋）の周囲に小さな円を連ねた**珠文**がめぐり、その外側にはギザギザの**鋸歯文**が巡らされています。ハスの花は仏教では清浄のシンボルとされ、蓮華文は古代**インド**に起源があり、中国の南北朝時代に瓦の文様として用いられるようになり、百済を経て日本に伝わった文様です。珠文を連ねた連珠文はペルシャ起源とされ、隋唐代に多く用いられ、唐代に瓦に使用されます。鋸歯文も中国で好まれた文様です。奈良時代の瓦の文様には当時の**最先端を行く海外のデザイン**が凝縮されています。

### 唐草文軒平瓦（からくさもんのきひらがわら）

●大安寺一丁目 大安寺旧境内出土 奈良時代（8世紀）

軒丸瓦と組合う軒平瓦には**古代ギリシャ**、**ローマ**で発達し、**シルクロード**を通じて伝わった**唐草文**で飾り、まわりに珠文をめぐらしています。文様部分は軒丸瓦と同じく木型による型づくりです。奈良時代の軒瓦は軒丸瓦が蓮華文、軒平瓦は唐草文が一般的ですが、寺院や宮殿によってそのデザインは異なっています。完全な形のものには軒丸瓦よりも重く、5～7kgの重さがあります。

## 丸瓦と平瓦（まるがわら ひらがわら）

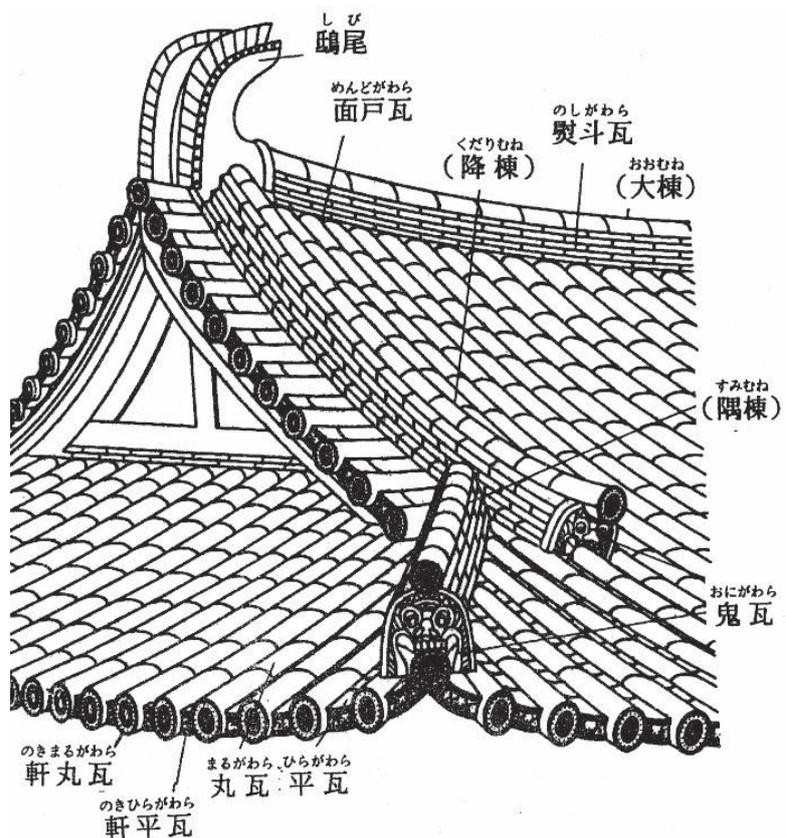
●大安寺四丁目 大安寺旧境内（杉山瓦窯）出土 奈良時代（8世紀）

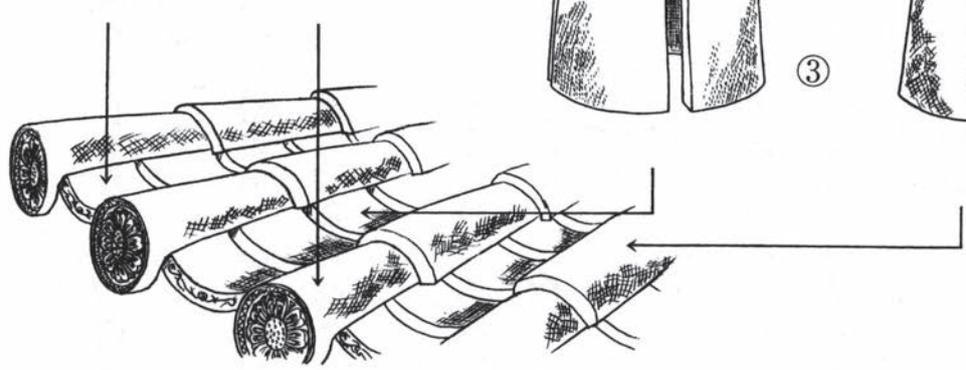
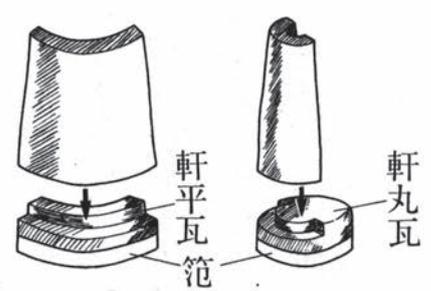
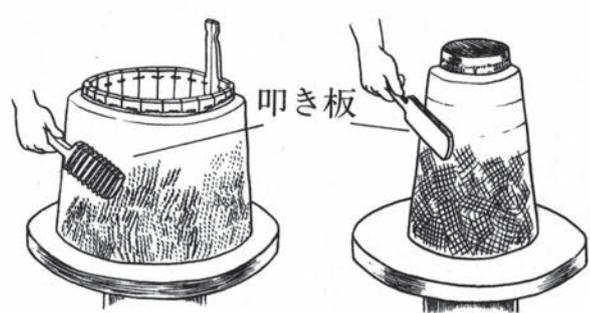
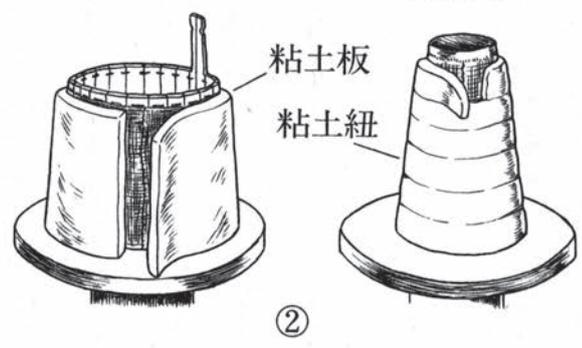
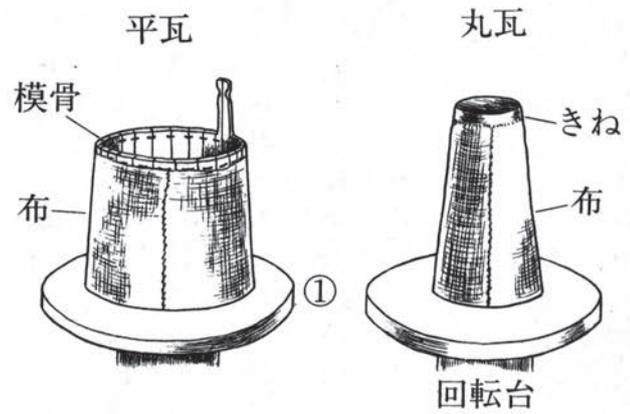
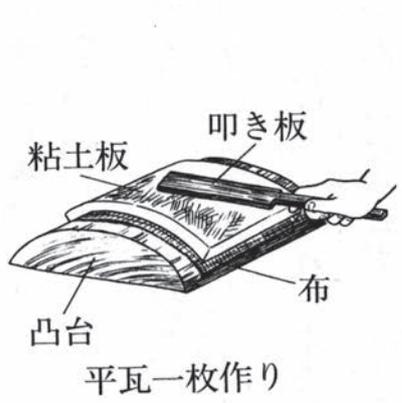
瓦葺建物で最も多く使われる瓦で平瓦は凹面を上、幅の狭い方を軒側（軒平瓦だけは軒先のほうが広い）にして半分ほどかさねながら軒先から並べ、平瓦間を丸瓦で蓋をして屋根を葺き上げます。このため、平瓦は丸瓦の倍近い数が必要になります。平城宮跡に復原されている朱雀門では4万枚近い瓦（軒丸瓦702枚・軒平636枚・丸瓦9,810枚、平瓦20,000枚、）が使われており、瓦の総重量は140トンを越えます（大仏殿だと約10万9千枚・約1,556ト）。奈良時代には建物基礎になる礎石と柱はつないでないため、この瓦の重さで建物が動かないよう押えているのです。

平瓦は奈良時代までは桶のような木型に粘土板を巻いて円筒形をつくり、これを分割してつくっていましたが（桶巻き技法）が、奈良時代にはかんたんに大量につくるため、凸形の台の上に布を敷き、粘土板をのせて縄を巻いた叩き板で一枚ずつ叩いてつくっています（一枚づくり）。このため、葺かれた時に下になる凸面には縄目、凹面には布目が残っています。布目は平安時代ぐらいの瓦までついていますので、**布目瓦ならば古代の瓦**ということがわかります。色合いは灰色のものだけでなく、黒灰色から赤褐色のものまでさまざま、硬質のものもあれば軟質のものもあります。

丸瓦は円筒形の木型に布袋をかぶせ、粘土板を巻き、縄を巻いた叩き板でたたいてつくっています。平瓦と違い、縄目は仕上げ時になで消すため、あまり残されていません。

平城宮や平城京の寺院に用いられた瓦は都に近く、原材料である粘土や燃料の薪が豊富な奈良山丘陵一帯で作られ、平城ニュータウンの**押熊瓦窯跡**（神功六丁目）、**歌姫西瓦窯跡**（朱雀四丁目）などの遺跡は公園として整備されており、見学することができます。また、大安寺では境内にある杉山古墳を利用して瓦窯がつくられています。







## 墨書土器（ぼくしょどぎ）

● 柏木町 平城京跡（左京五条一坊）出土 奈良時代（8世紀）

土器（須恵器）の裏に「東」という文字が墨で書かれています。奈良時代の人を書いた文字です。1300年前もの文字を現在の日本人誰もが難なく読め、その文字の意味がわかるというのも漢字のおかげです。ただ、「東」一字だけなので、「東」が土器の所有者を表すのか、使う場所を表したのか、略してあるらしく、何のために書いてあるのかわからないことが文字がはっきりと読めるだけによけい残念です。ひら仮名やカタカナの無い奈良時代には文章は漢文だけで、役人になるためには漢字を一字でも多く知り、正しく漢文で書けることが条件でした。出土する土器には漢字を書く練習をしたものもあります。



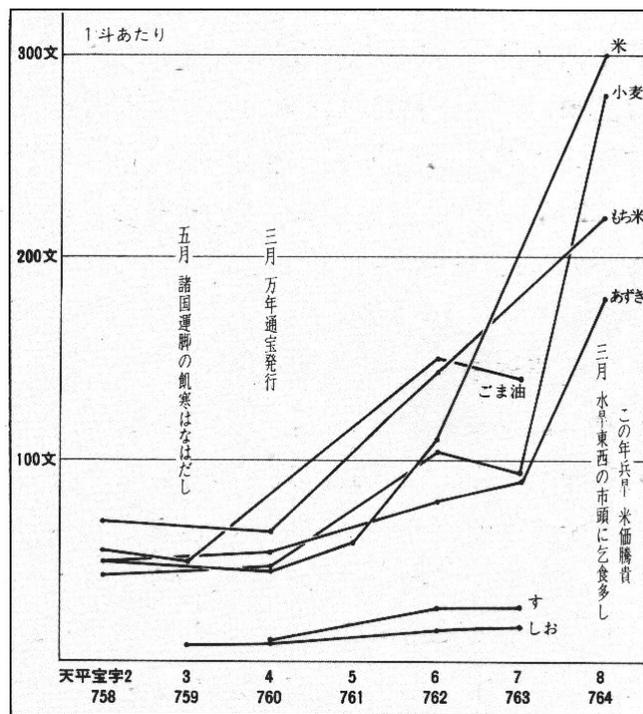
奈良時代の事務風景（『古代人のしごととくらし』城陽市歴史民俗資料館から転載）

## 和同開珎（わどうかいちん・わどうかいほう）

●東九条町 平城京跡（左京八条三坊）出土 奈良時代（8世紀）

日本で最初につくられた貨幣は「<sup>ふほんせん</sup>富本銭」と現在は考えられていますが、実際に貨幣として流通したものでどうかはわかりません。和同開珎は**本格的な流通貨幣**で銀銭と銅銭が発行され、それまで現物貨幣であった布や米などとの交換基準も定められました。平城京とその周辺では物を買うのはもちろん、役人や作業員の給料、税の支払いにも使われ、銭の貸付も行われましたが、地方では布や米が貨幣代わりに使われることも多かったようです。和同開珎は和銅元年（708年）に武蔵国秩父郡から銅が献上されたことをきっかけにつくられたとされますが、発行の目的は平城京建設に伴う費用の捻出にあったとも考えられています。平城京が都になった頃はこの1枚（1文）が白米1.7kg（現在の米価に換算すると約700円）ほどの価値があり、成人男子の日当が1文でした。その後、発行数の増加やニセ金づくりの横行で、その価値は下がり、天平年間には6分の1、東大寺大仏が出来た頃には15分の1から20分の1程度の価値になってしまいます。このため、

760年に新銭「<sup>まんねんつうほう</sup>萬年通寶」が発行され、その1文は和同銭10倍の価値と定められます。すると貨幣価値はさらに下落、凶作もあって物価はその後4年間で7倍近く値上がりし、奈良時代後半になると家や宅地だけでなく妻子までを担保にして借金する下級役人も現れることが、正倉院文書からわかります。765年にはさらなる新銭「<sup>じんぐうかいほう</sup>神功開寶」が発行され、これも和同銭の10倍の価値が定められます。こうした新銭発行はインフレーションを進行させるばかりで、平安時代（10世紀末）にはついには行き詰まってしまい、貨幣製造そのものが放棄されることとなってしまいます。奈良時代の銭は建物の地鎮やお墓などにも納められており、銭には**不思議な呪力**があると考えられていたようです。



高くなる物価 Price changes around A.D.760

「平城京展」図録 1989 から



和同開珎  
初鑄 708年



萬年通寶  
初鑄 760年



神功開珎  
初鑄 765年

# ドキ土器 Kit 利用案内

奈良市教育委員会では市内から出土した埋蔵文化財（出土品）の実物を各時代から選び、その解説書とともに学校に貸し出します。社会科学習、郷土を知る学習の補助教材として、ぜひご利用下さい。実物資料は体感的な学習効果を引き出す上で、絶好の教材になるかと思えます。

## [対象]

奈良市内に所在する小・中学校および奈良市立一条高等学校が行う授業等の教育的活動

## [貸出期間]

1キット1週間

※複数のキットの同時貸し出しは当面の間ご遠慮下さい。

## [キットの内容]

### ①縄文土器と弥生土器

縄文土器と弥生土器のセットです。縄文と弥生の違いを実物の土器から学べます。奈良市最古の縄文早期の土器片と弥生時代中期の壺形土器です。



### ②縄文時代の石鏃と弥生時代の石鏃・石包丁

打製石器と磨製石器の違い、狩猟具としての縄文時代の鏃と武器としての弥生時代の鏃の違いを実物から学べます。教科書に必ず載っている弥生時代の石包丁をセットしました。



### ③古墳時代の埴輪と須恵器

古墳といえば埴輪、古墳にならべられた埴輪と古墳時代の渡来技術を学ぶ須恵器のセットです。須恵器の質はさわってみないとわかりません。



### ④奈良時代の土器A・奈良時代の土器B

奈良の都、平城京で使われた土器の食器セットです。外来の金属器を模倣した形と規格性をもつ土器からは奈良時代の都人の生活がうかがえます。

食膳復原写真パネル・  
復原折敷付き



### ⑤奈良時代の瓦

奈良の都の屋根瓦（大安寺所用の軒丸・軒平・丸瓦・平瓦）です。瓦の文様から国際色豊かな天平文化を学ぶことができます。瓦屋根の重さは持ってみないとわかりません。



### ⑥奈良時代の硯と墨書土器・和同開珎

奈良時代の律令制度を支えた「文字」について、出土した硯と文字が書かれた墨書土器から学びます。また貨幣経済について、実物の和同開珎から学ぶことができます。



### [ 利用手続き ]

1. 事前に奈良市埋蔵文化財調査センター（Tel 33-1821・1822）に予約状況をご確認下さい。貸出は予約順とします。
2. 貸出から返却までの間の管理責任者をあらかじめ定め、資料借用申請書（学校長の公印が必要となります）を利用の10日前までにはセンターに提出して下さい。
3. 貸出費用は無料です。
4. キットの受渡しは奈良市埋蔵文化財調査センター（大安寺西二丁目281）で行いますので、センターに直接出向いて、借り受け、返却をしてください。
5. 貸出の際にセンター職員がキットの取り扱いについて簡単な説明をします。
6. 専用ケースおよび梱包材を一緒にお貸しします。

### [ 利用注意事項 ]

1. 借受期間中は学校で責任をもってキットを保管し、資料の汚損、損傷、亡失等がないよう細心の注意をもって取り扱って下さい。
2. キットは貸出を受ける目的以外に使用したり、転貸しないで下さい。
3. 貸出期間中の運搬や保管、使用中にキットの汚損、損傷、亡失等の事故が発生したときは、すみやかにセンターに連絡をとり、必要な指示を受けて下さい。
4. 借受期日までに必ず返却して下さい。  
（返却時に利用の感想・ご意見等お聞かせ願えれば幸いです。）

### [ お問い合わせ先 ]

奈良市大安寺西二丁目281番地  
奈良市埋蔵文化財調査センター  
電話 0742-33-1821・1822

